実践
アクティブ・ラーニング
日本史

より根源的な問いで歴史を「自分事」として捉えさせ、自ら思考を深める力を育む

福岡県立ありあけ新世高校
前川修一 まえかわ・しゅういち

教職歴 25 年。同校に赴任して2年目。教務主任。定時制1学年担任。地理歴史・公民科。担当科目である日本史の授業にアクティブ・ラーニングの視点をいち早く導入。学校を超えて多様な教師が集まり、授業改善について考える研修会を継続的に開催することで、全国の高校教師のネットワークづくりにも貢献している。

福岡県立ありあけ新世高校
◎校訓「自律・自彊・飛躍」の下、「新世生よ、人生のプロデューサーたれ！」を校是とし、充実した高校生活を送ることによって、社会で自立できる力を育む。
◎**設立** 2003（平成 15）年 ◎**形態** 全日制・総合学科／定時制・普通科／共学 ◎**生徒数** 全校生徒 502 人
◎**2020年度進路実績** 進学 124 人、就職 30 人。
◎**URL** http://ariakeshinsei.fku.ed.jp/Default2.aspx

2016 年 6 月号に登場

前回の取材後からの授業の変化

生徒がより考えを深められるよう、授業の導入を工夫し、問いを使い分ける

本誌2016年6月号の本コーナーに登場した前川修一先生は、現在、福岡県立ありあけ新世高校に勤務している。前回の取材後から、授業展開の基本構造は変わっていないが、指導方法の面ではいくつかの新しい試みを行ってきた。

その1つが、16年9月頃から取り入れている「看図アプローチ」だ。それは、授業の導入に絵や写真などの史料を提示し、生徒に「この絵の登場人物は何をしていると思う？」などと問いかけ、いくつかの選択肢の中から答えさせていく方法だ。

「絵や写真を見て、自分なりに想像して選択肢を選ぶことは、予備知識がなくてもできます。授業の導入に用いることで、学力に関係なく、すべての生徒が無理なく授業に参加できるようになりました」

加えて同時期に、単元ごとにメイン・クエスチョン（MQ）とファンダメンタル・クエスチョン（FQ）を設定し、その2つを場面に応じて使い分けて生徒に問いかけることも取り入れた。MQは、その単元で学ぶべきテーマを端的に示した問いで、FQは、その単元での学びを通じて、生徒に社会のあり方や自身の生き方を考えてもらう

図1 メイン・クエスチョンとファンダメンタル・クエスチョンの例

単元名	メイン・クエスチョン（MQ）	ファンダメンタル・クエスチョン（FQ）
文化の始まり	旧石器・縄文・弥生の各文化を分けるものは何か？	人は、なぜ便利な暮らしを追い求めようとするのか？
農耕社会の成立	倭の小国の王たちは、なぜ中国に使者を送ったのか？	外国（人）とつき合う時に大事なことは何か？
古墳とヤマト政権	古墳時代を3つに区分する理由は何か？	リーダーが部下を従わせる時に気を配ることは何か？
飛鳥の朝廷	飛鳥の朝廷が目指した国づくりは、具体的にどんなことか？	外国とのつき合いは、国内政治にどのような影響をもたらすか？

＊『歴史教育「再」入門』（前川修一・梨子田喬・皆川雅樹編、清水書院、2019.12）を基に編集部で作成。

ためのより根源的な問いだ（図1）。

「歴史を遠い過去の出来事としてではなく、自分のあり方や生き方にも生かすことができる『自分事』として捉えて考えられるよう、生徒にMQと一緒にFQも問いかけています。生徒が授業後に提出するリフレクションシートを見ると、回数を重ねるごとに記述量が増え、その内容も、授業で学んだことを現代の社会問題や自分の生き方に結びつけて記述するようになっており、考えを深めている様子が見て取れます」

前川先生の現任校である定時制高校には、学ぶ意欲をなかなか持てない生徒が少なくない。そうした生徒が、授業に「参加」して、学んだことを「理解」「習得」し、その内容を「活用」できるようになるための授業をいかにつくればよいのか。前川先生は赴任当初、生徒の状況に即した授業デザインを新たに考えようとしていた。ところが、授業を進めるうちに、定時制で求められる指導は、明確に体系化していなかっただけで、既に前任校で実践していたものと同じだと気づいた。そこで、授業を4段階に整理し、各段階に適した方法を工夫して授業を展開することにした（図2）。

「次第に学びに意欲的になっていく生徒の姿を見て、生徒の学びの段階に応じて、きめ細かく支援していけば、どのような学校であっても、限られた授業時間内でより深い学びへと誘うことが可能であることを実感しました」

図2 授業展開の各段階と主な方法

段階	主な方法
参加	**看図アプローチ** 授業に参加しやすくなるよう、ビジュアルテキストを基に、選択肢で生徒に問いかける。問いを重ねるごとに、より本質的で深い学びにつなげる。
理解	**知識構成型ジグソー法（＊1）** 史料を基に、生徒同士の対話的な学びで、学習内容の理解を深めることを目指す。 **MQ・FQ** 2つの問いを使い分け、生徒に当事者意識を持たせて、思考を深めさせる。
習得	**KP法（紙芝居プレゼンテーション法）** 教師が説明するだけでなく、生徒自身に学んだことをまとめ、発表させることで、習得を確かなものにし、また、習得事項を活用する力を育む。
活用	

＊前川先生の取材を基に編集部で作成。

授業の変化の背景

教育関係者との情報交換や書籍などで学び、新たな方法を積極的に導入

前川先生は、14年の高大接続改革答申（＊2）でアクティブ・ラーニングの視点が提唱された頃から、その実践研究を進めてきた。背景には、教師による講義型の授業だけでは、生徒の学習意欲や思考力を伸ばすことへの行き詰まり感があった。

アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を行うようになってからも、多様な教育関係者と情報交換を重ね、また、書籍などで最新の指導理論や方法を学んだ。そして、効果が期待できそうな方法を、積極的に授業に取り入れていった。看図アプローチも、協同学習の研究者として知られる鹿内信善（しかないのぶよし）教授（現・天使大学）から直接学び、その方法を習得した。

今後の展望

自ら問いを深める力があれば、限られた時間でも深い学びはできる

福岡県の公立高校は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、5月17日まで臨時休業だった。1学年担任の前川先生は、オンラインツールを使ったホームルームを行う中で、学級づくりの導入にオンラインツールの有効性を感じたと語る。

「定時制には、過去に不登校を経験するなど、人とのかかわりが苦手な生徒が少なくありません。オンラインでは、ほかの生徒と直接顔を合わせなくてもコミュニケーションが取れるため、新しい人間関係に徐々に慣れることができたようです」

看図アプローチなどで用いる史料はオンラインでも示すことができたり、生徒同士の意見交換も、生徒をオンライン上でいくつかのグループに分けて行うことができたりすることから、授業においてもオンラインツールの有効性を実感している。そのため、今までの授業スタイルをオンラインで展開することは、十分可能だと考えている。

また、学校が再開した今、授業時数の確保が課題と言われているが、前川先生は次のように指摘する。

「仮に授業時数を確保できなかったとしても、主体的・対話的で深い学びを通じて、授業で学んだ内容を自分事として捉え、自ら問いを深めていける力を身につけた生徒は、限られた授業時数の中でも深い学びができるはずです。そうした授業を実践しなければならないと、強く感じています」

＊1 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。 ＊2 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」のこと。